

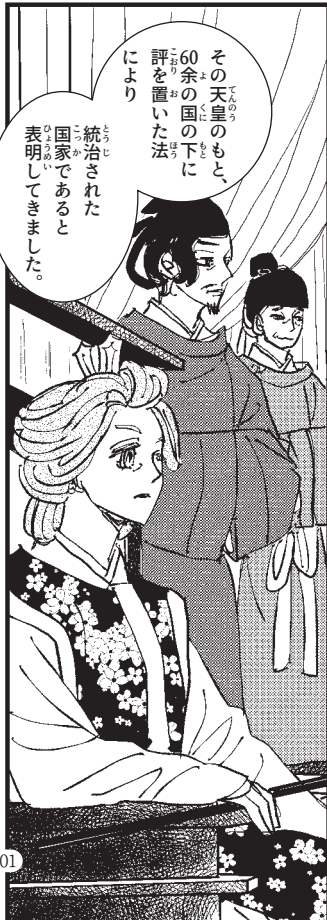


和銅元(708)正月、

武蔵国秩父郡が
和銅を献じたことにより、
慶雲5年を改め
和銅元年と改元。

この慶賀により、
従二位不比等は
正二位に、

従六位上
多治比真人広成は
従五位下に昇進



その天皇のもと、
60余の国の下に
評を置いた法
により

統治された
国家であると
表明してきました。



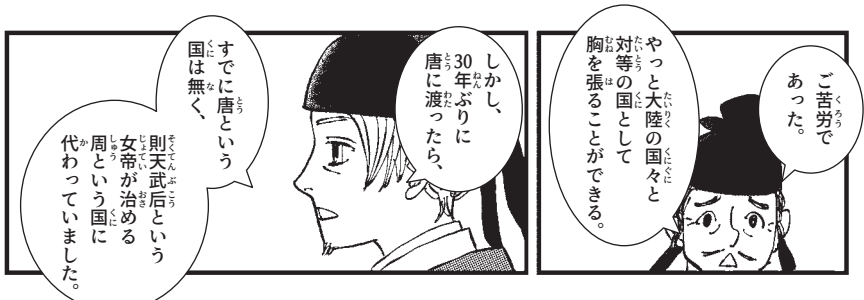
2月15日。
遷都の最終審議

まず、
先日のご報告
したように、

わが国は
こたび完成した
大宝律令により、

これまで
「倭」としていた
国号を「日本」に
改め、

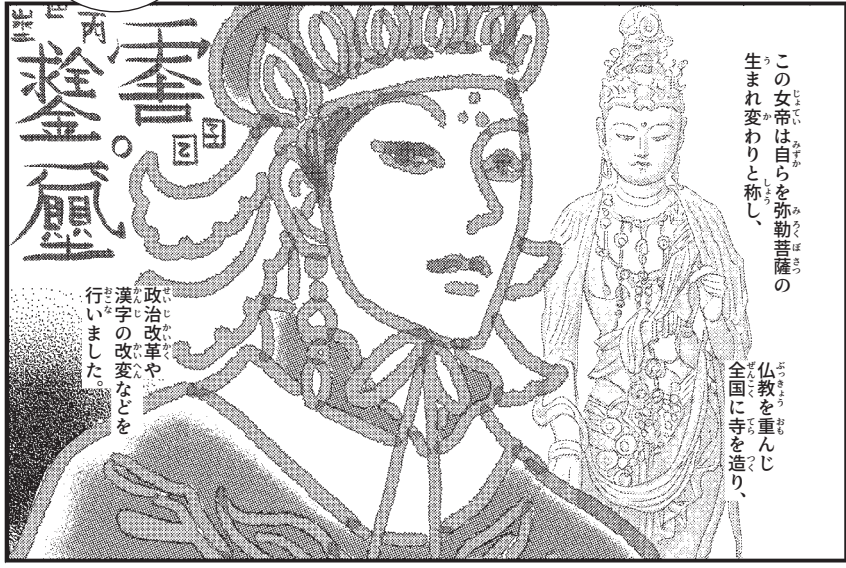
その国を統治した
「王」の称号も
新たな君主号として
「天皇」とし、



すでに唐という国は無く、
 則天武后という女帝が治める周という国に代わってしまいました。

しかし、30年ぶりに唐に渡ったら、

ご苦労であつた。
 やつと大陸の国々と対等の国として胸を張ることができる。



内
 鑿。書。風。

この女帝は自らを弥勒菩薩の生まれ変わりと呼し、

仏教を重んじ全国に寺を造り、

政治改革や漢字の改革などを行っていました。



遷すのか？
 これらの寺も遷都となると本日の議題となる

この都にも薬師寺や川原寺、大官大寺などを立て続けに建立してきたが、

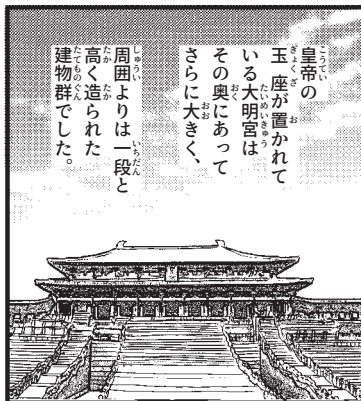
飛鳥寺をはじめ、四天王寺、法隆寺、

わが国も推古帝の時から厩戸皇子などの勅めにより、

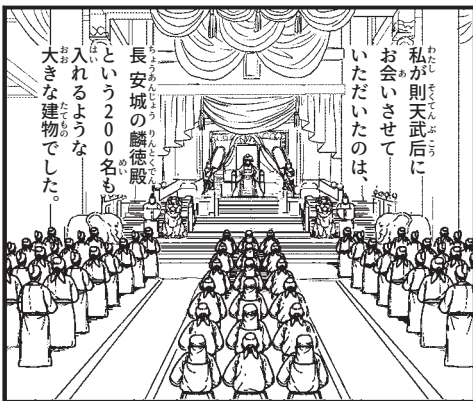


まずはなぜ、この都が不都合なのか、そこからお話しいたします。

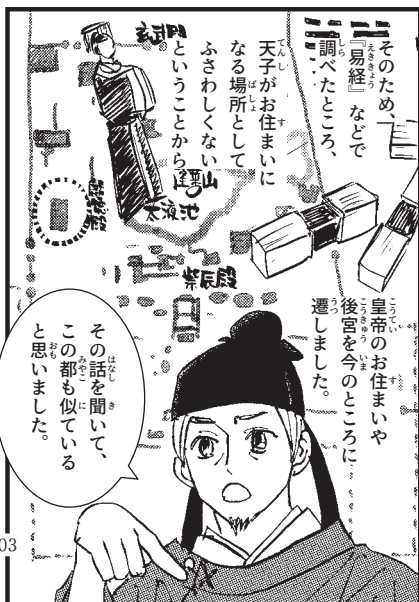
寺院のことは後で皆さんにご検討いただきませんが、



皇帝の玉座が置かれていた大明宮はその奥にあってさらに大きく、周囲よりは一段と高く造られた建物群でした。



私が則天武后にお会いさせていただいたのは、長安城の麟徳殿という200名も入れるような大きな建物でした。



その話を聞いて、この都も似ていると思いました。

そのために「易経」などで調べたところ、天子がお住まいになる場所としてふさわしくないというところから、後宮を今のところに移しました。



案内役をしてくれた官人に聞いたところ：以前、宮殿の北側には池があり、風光明媚でしたが湿度が高く、そのためか太宗以来歴代皇帝が病気がちでした。

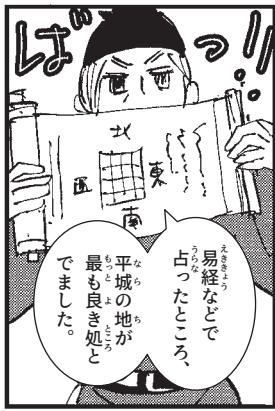


この場所は、
帝がお住まいになられ、
政務をとられる場には
ふさわしくないかと
思われます。

先の持統帝も
もつと長く
御壯健でいらして
いただきましたかった
のですが



草壁皇子、この度の文武帝
とも若くしてお亡くなりには、



ばっ!!

易经などで
占ったところ、
平城の地が
最も良き処と
でした。



で、その
候補地は？
遷都もやむなし
であるな。

帝をはじめ、
百官、万民の
暮らしが安寧で
あるためには

※2「四禽」とは東西南北の四方を守る神のこと。97ページ参照。「三山」とは東の香天山、北の平城山、西の生駒山を指す



この地が良いと
思われます。
ご決断を。



「平城の地は
四禽図に叶い、
三山鎮をなす」
とあります。

亀トや笹竹の
占いでは

※1 亀の甲羅のひびで占うこと



大納言・正二位の
不比等が右大臣に

この日
大規模な昇叙が
行われ、

3月13日



従三位
粟田朝臣真人は
大宰帥に、

従五位下
多治比真人広成が
下野・国初代の
国司(守)に、

※4 大宰府の長官(48ページ参照)



従四位下
古麻呂が
式部卿に、

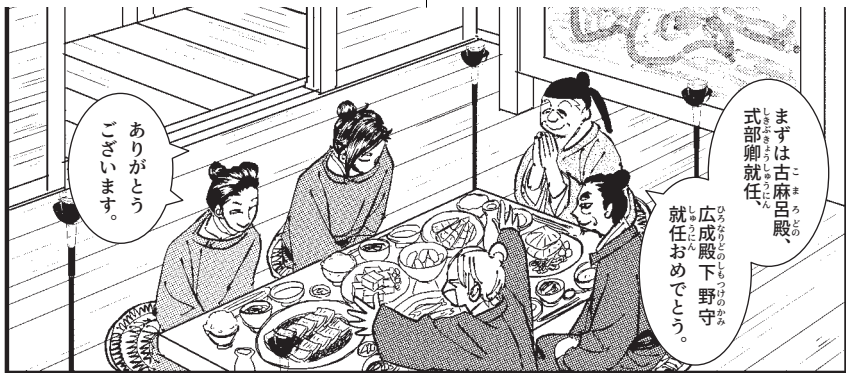
※3 式部省の長官(48ページ参照)



午後から宮中で祝宴。
その夜、古麻呂の屋敷に
古麻呂・真人・巨勢朝臣多益首・
広成・土師宿禰馬手が集まった。



従四位上
巨勢朝臣多益首を
大式(次官)に任命した。



ありがとうございます。
ごさいます。

まずは古麻呂殿、
式部卿就任。
広成殿下野守
就任おめでとう。



わしはいずれにしても、

だれも予想していなかった。

まさか真人殿が
また大宰府に行く
ことになろうとは



真人殿も
多益首殿も
おめでとう
と言って
よいのか…

そうだな…
やられたな。
なあ、
多益首殿。



そうじゃ、
うるさい奴は速くに
追いやられるんだよ。

口封じ？
やはり、
大納言ですか。



わしは口封じだよ。

いや、
今日からは
右大臣か。
恐らく、
多益首殿は巨勢
という名族のため
大宰府行きだのう。

※真人は持統3(689)年、大宰大式(次官)として大宰府での勤務経験があった





大式だいしきの多益首殿たやくすのには
4人もの護衛ごゑいの従者じゆうしやが
付くこととなった。

この度の人事にんじで
ワシには8人

初めてのことに
ですね。



大幸府だいさいふからでは
助け舟たすけふねも出せぬ
からな。

官位くわんいを取り上げる
大義名分たいぎなぶんとなるから
益々ますます気をつけなされ。

式部卿しきぶけいが
先日せんじつのような発言はつげんを
したら問題もんだいとなり、

※ 真人はその後、和銅8(715)年に正三位に昇進した後、養老3(719)年に亡くなった



そうだ。
恐らく右大臣うだいにんの
入知恵いれちえだろうよ。

わしらは大幸府だいさいふで
監視かんしされて生活せいかうする
ようだな。

なあ、大式殿だいしきどの。
アツハツハツハ。

別れわかれを惜おしんで
その夜よは遅おそくまで
酒さけを交まじわした。

これが古麻呂こまろと真人まことの
最後の別れわかれとなった。



7月15日



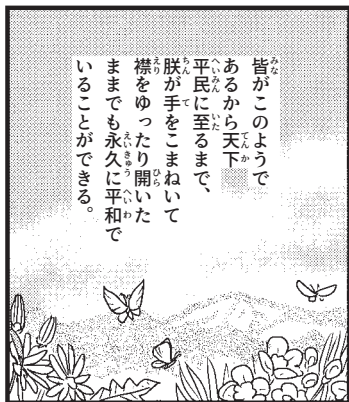
その後のちしばらく、
古麻呂こまろは式部卿しきぶけいとして
その重責じゆうせきを担おった。



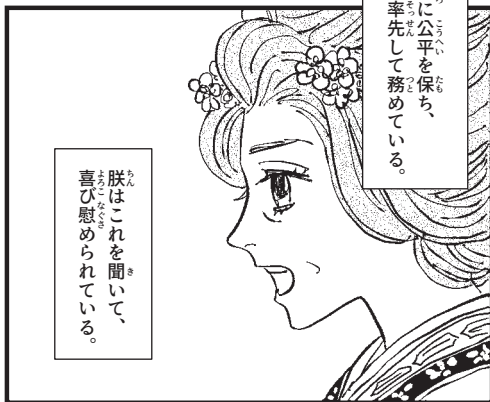
穂積親王、
左大臣石上朝臣麻呂、
右大臣藤原朝臣不比等、
大納言大伴宿禰安麻呂、
中納言小野朝臣毛野、
阿倍朝臣宿奈麻呂、
中臣朝臣意美麻呂、
左大弁巨勢朝臣麻呂、
式部卿下野朝臣古麻呂を
御前にお召になつて、

天皇自ら、
次のような
お言葉があった。

「皆は心に公平を保ち、
百寮に率先して務めている。」



皆がこのようであるから天下
平民に至るまで、
朕が手をこまねいて
様をゆつたり開いた
ままでも永久に平和で
いることができる。



朕はこれを聞いて、
喜び慰められている。



そして
阿倍朝臣宿奈麻呂は
正四位上
下毛野朝臣古麻呂・
中臣朝臣意美麻呂・
巨勢朝臣麻呂には
正四位下が授けられた。



卿らの子々孫々栄言ある地位を
保ち、次々と継承して朝廷に
仕えることであらう。

「今後も各自努力
してほしい。」



さらに八省、
神祇官、武官などに
勤務する上級官吏には

「臣下が忠義で
清らかな心を持ち臣下
として子のように君主に
仕える業を守れば、
荣誉と貴い位を受ける。」

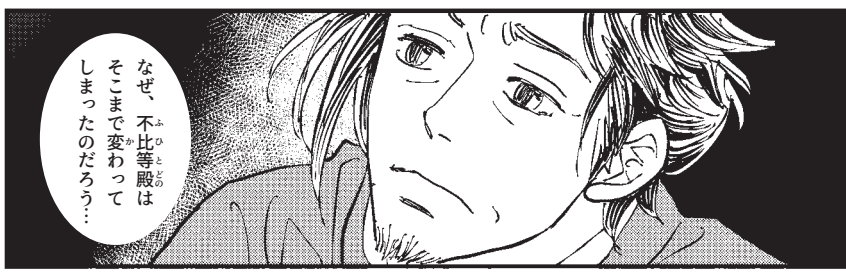
もし心が濁り臣下と
しての道を失ったならば
必ずや罪や辱めを被る」
との詔があった。



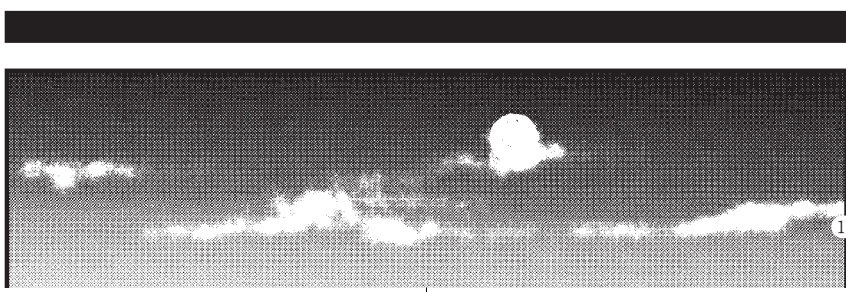
この夜、古麻呂は一人屋敷で
月を見ながら今回の昇進の
意味を考えた。

わいら、
四位の者だけ昇進し
禄をいただいたが
何のためだ？

おとなしく仕事を
すればこのように昇進
できるぞと右大臣からの
無言の伝達なのだろうか…



なぜ、不比等殿は
そこまで変わって
しまったのだろうか…





古麻呂殿よ。

わざわざ、
帝のお言葉をお借り
してまで、そなたを
諷めているのです。

お分
かり
いた
だけ
まし
たか…



何事も古麻呂に
相談するようにと
おっしゃった時、
帝は私よりも
そなたを選んで
おそばに置かれた。



あなたと真人殿は
この私が嫉妬するほど
優秀すぎるのです。



私はいつか、
そなたが藤原一族の
邪魔になると思うと
背筋が寒くなった…



あの天智様から
大織冠の称号と
藤原の姓をいただいた
鎌足の息子である
私を差し置き、

田舎者のそなたが
選ばれるなぞ、
耐えられぬ屈辱
であった。



そなたは、
帝をはじめ、高官
すべての人々に対して
裏表のない態度だから
好かれ尊敬されている。

しかし、
国の政を
担う私には、

それは私には
できぬことだ。



和銅元(708)年
9月14日

古麻呂殿

元明天皇が
本日午前中に
菅原に行幸され、
おかげを
持ちまして、

菅原の民90戸に
対して移転の保証を
して下さる内諾を
いただきました。



これも古麻呂殿や
真人様のお蔭です。
ありがとうございます。

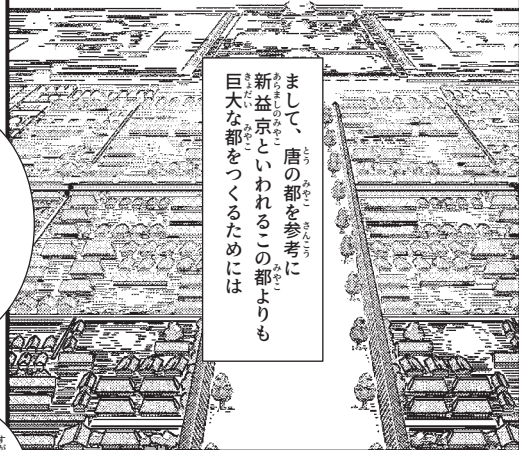
菅原の土地の
者たちに代わり
お礼を述べさせて
いただきます。

私は、
あたりまえの
ことをしただけ
ですよ。

新しい都を
つくるためには、
庶民の協力は
不可欠です。



そこに住む人たちが
国の考えを受け入れて
くれなければ
事業は円滑に
進みません。



まして、唐の都を参考に
新益京といわれるこの都よりも
巨大な都をつくるためには



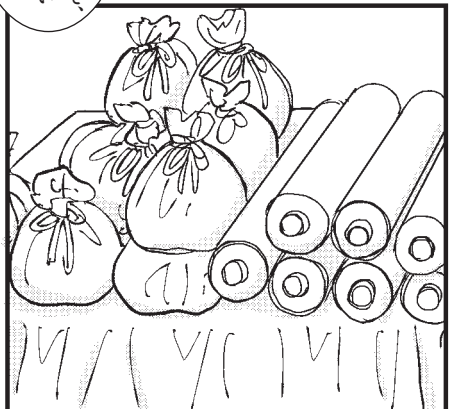
菅原の者をはじめ、
平城の者たちも

古麻呂殿に感謝して
率先して協力したい
と言っております。

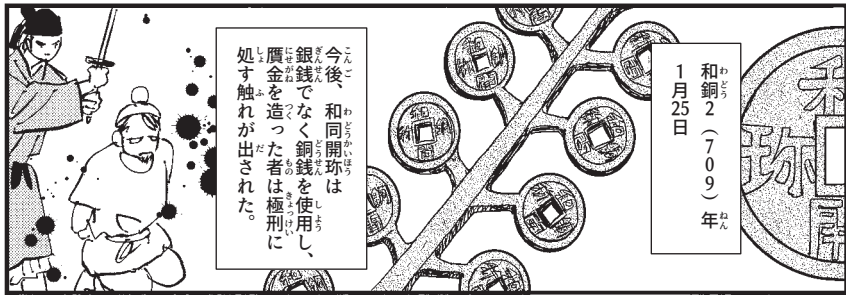
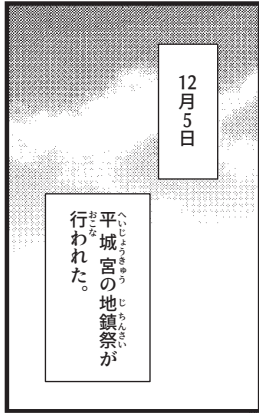


先の大王の皆様が
お眠りになる大墓の
改葬も行わなければ
なりません。

これだから
大変ですよ。



それはありがたい！
皆に宜しく伝えて
ください。

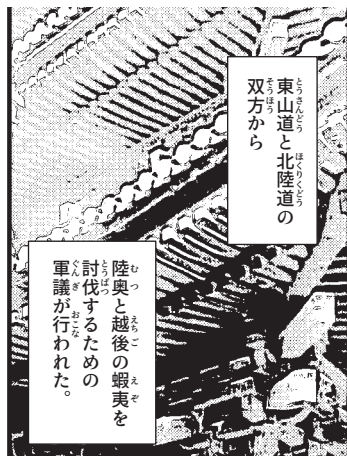




平城遷都を急いでいる最中に、

なぜ今、蝦夷に出兵するのか、

その必要はないのではありませんか？



東山道と北陸道の双方から

陸奥と越後の蝦夷を討伐するための軍議が行われた。



では私から。

先日の銭の改変などによるモノの値段の高騰、さらに西国の飢饉

そのさなかに多大な国費を投じての新しい都づくり、



古麻呂殿、

まさに今、この時だから出兵が必要なのだ、

お判りいただけませんか？

わしにはわかりかねる。



待ってください。

そのようなことで、多くの民を戦に行かせるのですか？



地方では役所や道などを建設する労働にかり出され、庶民の不平不満が高まっているとの報告を受けている。

それをなんとかせねばな。

罪もない蝦夷の
人々を苦しめる
のですか？

そういえば、
古麻呂殿の育った
東国は、少し前まで
蝦夷と同じ地の果て
でしたな。

だから、
蝦夷の肩を持つのも
仕方がないか。

なに！
ふさげるな！

わたしは、
蝦夷とか東国などの
話をしていいのではない。

なぜ、罪もない人同士が
不要な争いをしなければ
ならないのかと
言っておるのだ！

古麻呂殿、
そこまで
しなされ。

これはすでに
帝にも上奏し
決まったこと。

中止はできぬ。

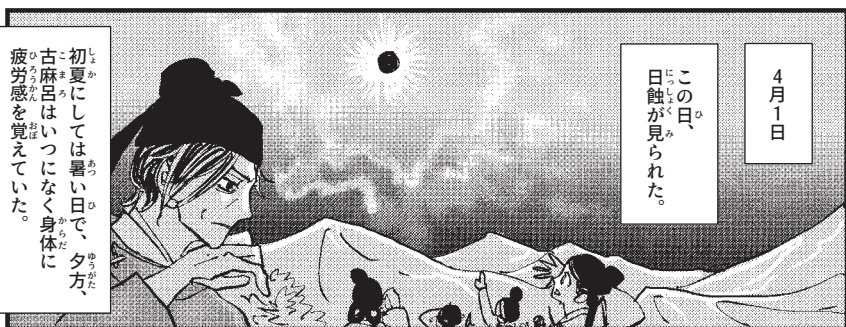
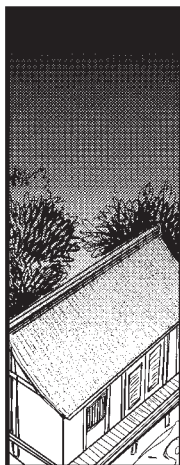
ならば、
下野からは
兵を出さぬ。

式部卿として、
下野国の守である
多治比真人広成に
文を送りそうさせて
いただく。

勝手になされ。

わしは
右大臣として
東国諸国に
出兵を命じる。
*

※ 不比等の命令で、遠江・現の御前(御前)・駿河・甲斐・現の世御・信濃・上野・越前・現の御前(御前)・越中・現在の世御から兵士が出されたが、下野からの出兵は免れた。(続日本紀)には下野の記載はない





彼は出世すると
吉備や東国、陸奥などの
国守としてほとんど
都にいなかった。

もう少し、
話ができる機会が
あったらよかった
のだが。

友と呼べる人が
亡くなるのは
残念だ。



7月1日

上毛野朝臣男足の弟
従五位上上毛野朝臣安麻呂
が陸奥守に任じられ、

諸国から蝦夷を
打つための兵器が
出羽の柵に送られた。

13日には兵と武器を積んだ
越前・越中・越後・佐渡の
百艘による船団が
蝦夷征討の根拠地に送られた。

※1 前線基地のこと



9月26日

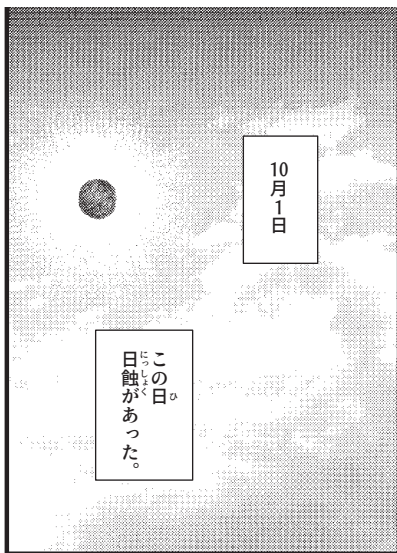
従五位下藤原朝臣房前が
東山・東海の二道に派遣され
関や柵、それぞれの
地域の調査を行った。

房前と共に
藤原氏に近い立場の人たちが
その功績として恩賞を受けた。

古麻呂は、参議・式部卿として、
この人事とその後の褒賞に
異議を唱えたが、
すでに十分な体調ではなく、
近頃は公務も
休みがちであった。

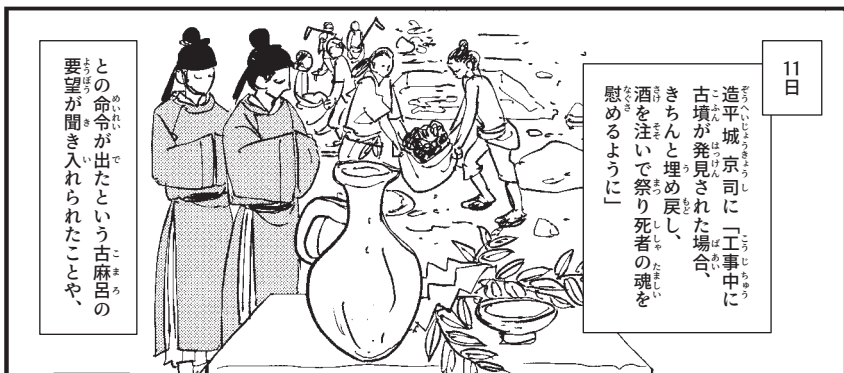


古麻呂はその夜、
胸に苦しさを覚え、
翌日から起きることが
できなくなった。



10月1日

この日
日蝕があった。



11日

造平城京司に「工事中に
古墳が発見された場合、
きちんと埋め戻し、
酒を注いで祭り死者の魂を
慰めるように」

との命令が出たという古麻呂の
要望が聞き入れられたことや、



26日には古麻呂の
指示により、
宮門に諸国の騎兵
500人が整列し、

薩摩国の隼人
188人が朝廷に
参内する儀式が行われ

隼人に対して
失礼のない対応が
行われたことなどが

※2 現在の鹿児島県西部



28日には、
「遷都のための移住などで人民が
動揺しており、朕は大そう哀れを
感じるため、今年の調と租（税）を
免じることとした」という、
詔が下された。

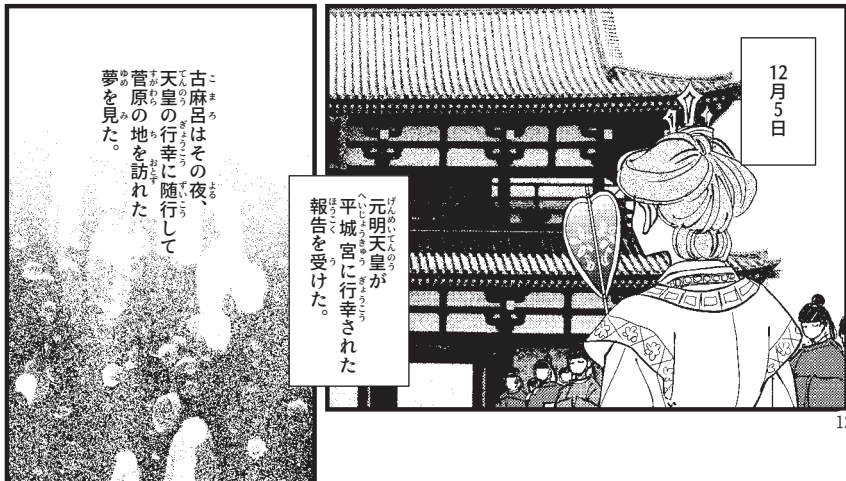
自宅で休んでいる
古麻呂の下に
報告された。



きっと私が病に
伏しているのを
哀れと思ってくれて
いるのであろう。

これらの要望は、
恐らく右大臣が
我が願いに答えて
くれたことだろう。

これも以前古麻呂が帝に
お願いしたことであった。



12月5日

元明天皇が
平城宮に行幸された
報告を受けた。

古麻呂はその夜、
天皇の行幸に随行して
菅原の地を訪れた
夢を見た。



そして、
馬で、綺文人、伊須美阿比登と
3人で菅原から山背を駆け抜け、
近江の海のほとりから
下野を目指し、
東山道をひたすら
走っている夢を見た。



また、遠く筑波山を望みながら、
衣川（鬼怒川）で、長男の虫麻呂と
アユ釣りをしている。



夢の中の古麻呂は30代で、
佐久良や小さなわが子たちが
下野の屋敷で楽しそうに
食事をしていた。

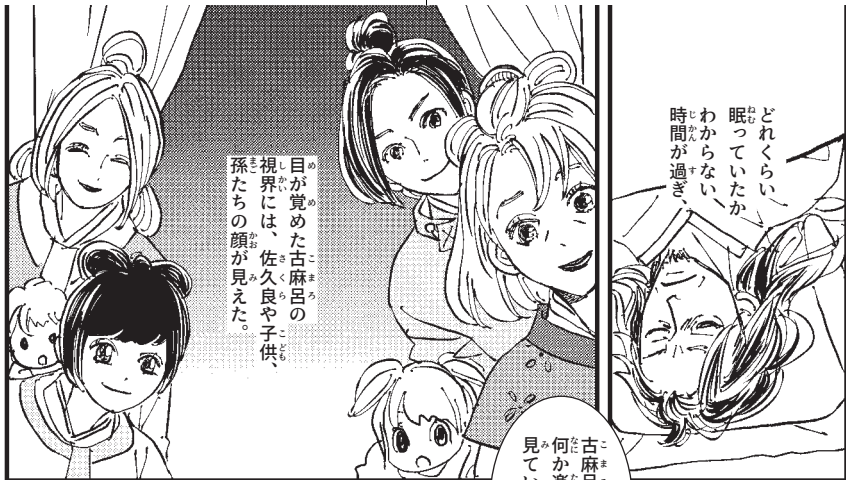


冬には雪をかぶった
補陀洛山を背景に、
下野薬師寺に参拝に
行ったことが

走馬灯の
ように次から次へと
頭の中を駆け抜けた。



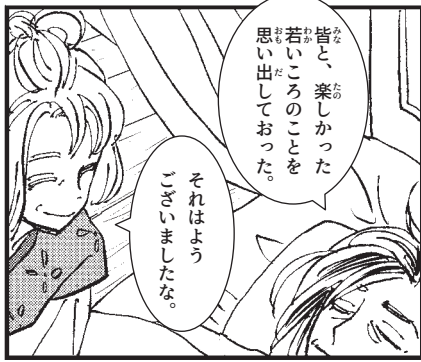
秋には富士山が見える
田んぼでの稲刈り、



目が覚めた古麻呂の
視界には、佐久良や子供、
孫たちの顔が見えた。

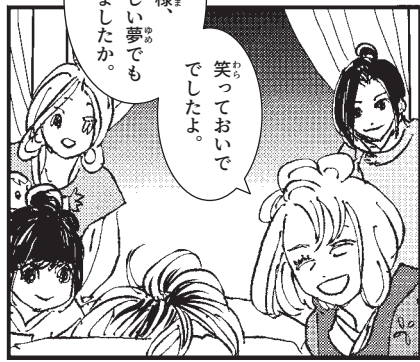
どれくらい
眠っていたか
わからない
時間が過ぎ、

古麻呂様、
何か楽しい夢でも
見ていましたか。



みな、楽しかった
若いころのことを
思い出しておった。

それはよう
ございましたな。



笑っておいで
でしたよ。



わたしたちの
ふるさと、
東の飛鳥へ
帰りましょう。

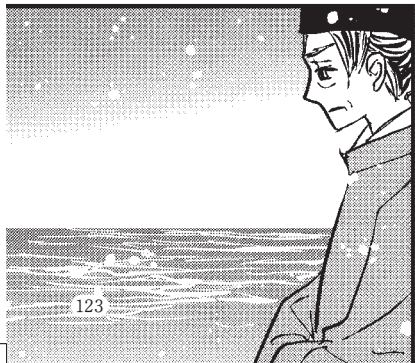


すべて
なつかしい
下野のこと
であった。



そうだな、
楽しい日々であった。
ありがとう…。

12月20日、
参議・式部卿大將軍
正四位下野朝臣古麻呂の
人生の幕が下りた。





遷都は目前で
これからさらに
議論しようと思
っていたのに、
矢先だったのに。

残念だ。

良き友で、
良き敵であった
朋友がいなくな
るとは。

古麻呂殿、
安心して
お休みなされ。



残念だ。

大宰府で計報を聞いた
粟田朝臣真人

仏を祀るための
下野寺を平城の都に
造れるように
いたしまする。



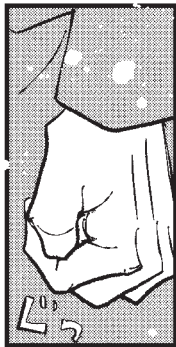
そなたが信心し
集めた經典や

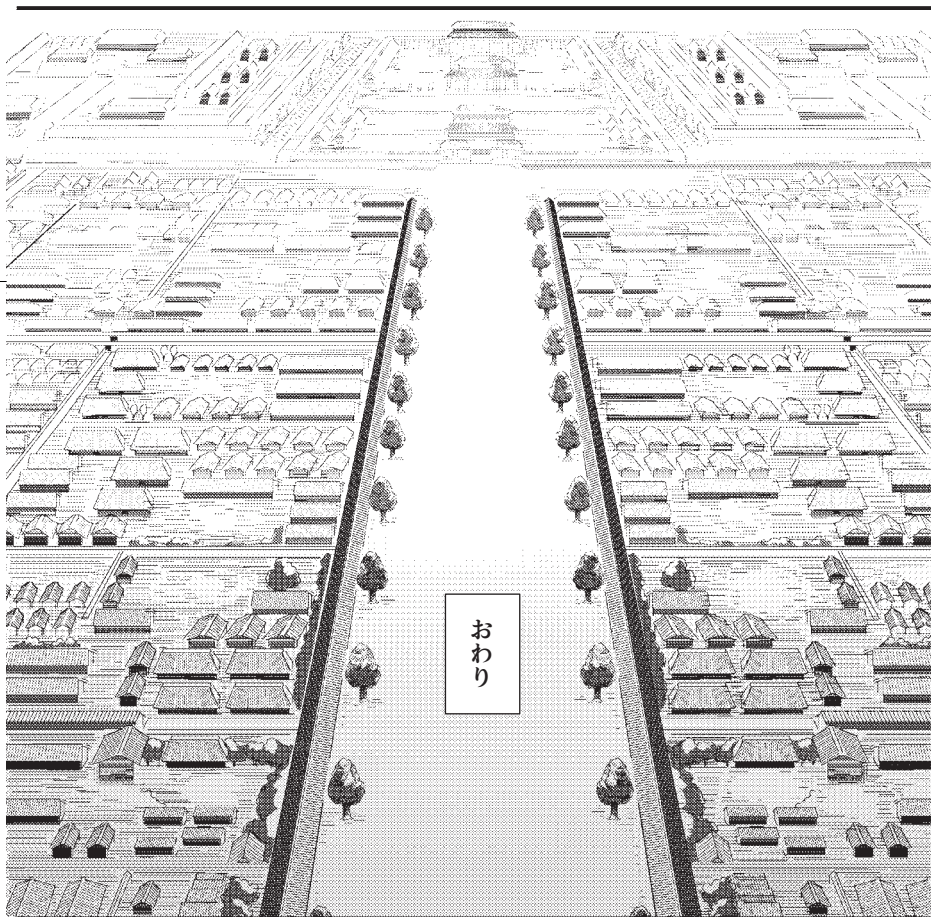


また、一緒に
酒を飲みながら唐の
話がしたかったな！

古麻呂殿が希望
していたように
一緒に唐に渡って
みたかった！

これで、都の中で
右大臣に意見を言える
漢がいなくな
ってしまっただ！





	年(西暦)	主な出来事(太字 = 下毛野・下野国関連)
古 墳 時 代	6世紀中頃	この頃、 下毛野国 が成立か
	538/52	百済から 仏教 が伝わる
	6世紀後半	下野型古墳 が造られる/ 甲塚古墳 が造られる
飛 鳥 時 代	593	厩戸王(聖徳太子)が 国政 をつかさどる
	604	憲法 十七 条を定める
	618	李淵、隋を滅ぼし 唐 を建国
	630	第一回の遣唐使派遣
	645	中大兄皇子・中臣鎌足らが蘇我蝦夷・入鹿父子を討つ(乙巳の変)
	646	大化の改新の詔を出す
	663	倭、百濟連合軍が朝鮮半島の白村江で新羅・唐に大敗(白村江の戦い)。 東国の 家族 も半島へ兵として行く
	670	戸籍(庚午年籍)をはじめてつくる
	672	壬申の乱が起こる
	673	壬申の乱に勝利した大海人皇子(天武天皇)が飛鳥浄御原宮で即位
	676	新羅が朝鮮半島を統一
	680~90頃	西下谷田遺跡(古代の役所)や落内遺跡(下野薬師寺下層遺跡)
	681	律令と国史の編さんがはじまる
	684	新しい身分秩序「八色の姓」制定され、これにより下毛野氏は「朝臣」を授けられ、名実ともに下毛野国を統治する氏族に
		この頃、下野薬師寺創建か
	687 ~690	新羅の人たちを下毛野国に移住させる(日本書紀)
	689	飛鳥浄御原令が制定される 古麻呂、奴婢600人を解放
	694	藤原京に都を移す
	701	「大宝律令」が制定される
	古麻呂が帝に律令の講話を行う	
	この頃、意斯麻呂らが那須直韋提を偲び石碑を記る(那須国造碑)	
708	和同開珎を発行/平城遷都決定	
709	下毛野朝臣古麻呂が亡くなる	
奈 良 時 代	710	平城京に都を移す
		平城京内に下野寺がつくられる

関
係
年
表

参考文献

- ◇ 相原嘉之 (2017) 『古代飛鳥の都市構造』 吉川弘文館
- ◇ 相原嘉之 (2018) 『飛鳥・藤原の宮都を語る「日本国」誕生の軌跡』 吉川弘文館
- ◇ 青木和夫ほか校注 (1989～1998) 『続日本紀1～5』 (新日本古典文学大系) 岩波書店
- ◇ 朝日新聞社 (2002) 『飛鳥・藤原京展』 (奈良文化財研究所創立50周年記念)
- ◇ 上野 誠 (2000) 『万葉人の生活空間—歌・庭園・くらし』 塙新書
- ◇ 荒井秀規 (2017) 『〈覚醒〉する関東』 (平安時代 古代の東国3) 吉川弘文館
- ◇ 大阪府立近つ飛鳥博物館 (1994) 『常設展示図録』
- ◇ 大阪府立近つ飛鳥博物館 (2010) 『ふたつの飛鳥の終末期古墳—河内飛鳥と大和飛鳥—』 (平成21年度冬季特別展図録)
- ◇ 大田原市なす風土記の丘湯津上資料館 (2014) 『那須国造碑—時代と人をむすぶもの—』 (平成26年第2回企画展)
- ◇ 川尻秋生 (2017) 『飛鳥・奈良時代 坂東の成立』 (東国の古代②) 吉川弘文館
- ◇ 木下正史 (1993) 『地中からのメッセージ 飛鳥・藤原の都を掘る』 吉川弘文館
- ◇ 木下正史・佐藤信編 (2010) 『飛鳥から藤原京へ』 (古代の都1) 吉川弘文館
- ◇ 木下正史 (2016) 『飛鳥史跡辞典』 吉川弘文館
- ◇ 小畑弘己・寺前直人・高橋照彦・田中史生 (2010) 『国のなりたち 旧石器時代から飛鳥時代』 (Jr.日本の歴史1) 小学館
- ◇ 佐藤信編 (2002) 『律令国家と天平文化』 (日本の時代史4) 吉川弘文館
- ◇ 滋賀県立安土城考古博物館 (2016) 『飛鳥から近江へ 天智天皇の意図を探る』 (平成28年度秋季特別展)
- ◇ 須田勉 (2012) 『古代東国仏教の中心寺院下野薬師寺』 (シリーズ「遺跡を学ぶ」082) 新泉社
- ◇ 館野和己 (2001) 『古代都市平城京の世界』 (日本史リブレット7) 山川出版社
- ◇ 田辺征夫・佐藤信 編 (2010) 『平城京の時代』 (古代の都2) 吉川弘文館
- ◇ 寺崎保広 (2002) 『藤原京の形成』 (日本史リブレット6) 山川出版
- ◇ 寺崎保広 (2013) 『若い人に語る奈良時代の歴史』 吉川弘文館
- ◇ 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 (2004) 『天武・持統朝—その時代と人々—』 (春季特別展)
- ◇ 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 (2010) 『奈良時代の匠たち—大寺建立の考古学—』 (平城遷都1300年記念 橿原考古学研究所附属博物館開館70周年記念秋季特別展)
- ◇ 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 (2012) 『「日本国」の誕生』 (『古事記』完成1300年記念事業・平成24年秋季特別展)
- ◇ 奈良文化財研究所編 早川和子 絵 (2016) 『飛鳥むかしむかし』 (飛鳥誕生編) 朝日選書949
- ◇ 奈良文化財研究所編 早川和子 絵 (2016) 『飛鳥むかしむかし』 (国づくり編) 朝日選書950
- ◇ 奈良文化財研究所飛鳥資料館 (2014) 『いにしへの匠たち—ものづくりからみた飛鳥時代—』 (平成26年度春季特別展)
- ◇ 奈良文化財研究所飛鳥資料館 (2017) 『早川和子が描く飛鳥むかしむかし』 飛鳥資料館図録第66冊
- ◇ 仁藤敦史 (2012) 『NHKさかのぼり日本史10 奈良・飛鳥 都がつくる古代国家』 NHK出版
- ◇ 三上喜孝・藤森健太郎 (2010) 『都と地方のくらし 奈良時代から平安時代』 (Jr.日本の歴史2) 小学館
- ◇ 右島和夫・若狭徹・内山敏行編 (2011) 『古墳時代毛野の実像』 (季刊考古学別冊17) 雄山閣
- ◇ 森 公章 (2002) 『倭国から日本へ』 (日本の時代史3) 吉川弘文館
- ◇ 若狭 徹 (2017) 『前方後円墳と東国社会』 (古墳時代 古代の東国1) 吉川弘文館
- ◇ 渡辺晃宏 (2001) 『平城京と木簡の世紀』 (日本の歴史04) 講談社



東の飛鳥

Higashi no Asuka
下野市 Shimotsuke City

しもつけのこまる
マンガふるさとの偉人 **下毛野古麻呂**

令和4（2022）年3月発行

漫画 第1・3章 さくたひろみ 朔田 浩美 第2章 じしま 治島 カロ

原作 下野市教育委員会事務局文化財課長 山口 耕一

発行 下野市教育委員会事務局文化財課
〒329-0492 栃木県下野市笹原26

制作 有限会社 随想舎
〒320-0033 栃木県宇都宮市本町10-3 TSビル
TEL 028-616-6605 FAX 028-616-6607

装丁・組版 塚原 英雄

印刷 モリモト印刷株式会社

本書の無断転載、複製、複写（コピー）、翻訳を禁じます。

© Shimotsuke City Board of Education Secretariat Cultural Assets Division